

南信州 ONE TEAM で取り組む CSF 対策

○井上紗季、松澤直樹、矢彦沢小百合、宮澤隆
(飯田家畜保健衛生所)

要 約

2018年9月、岐阜県で国内26年ぶりにCSFが発生し、その後愛知県でも発生がみられた。CSFウイルスの伝播には野生イノシシの関与が示唆され、これらの県と隣接している当管内への本病の侵入が危惧された。このような状況の中、管内では関係機関の協力のもと、いち早く防鳥ネット及び防護柵の設置支援を開始した。2019年7月、本県の野生イノシシでも陽性を確認したため、野生イノシシへの経口ワクチン散布を実施すると共に、全養豚場の埋却予定地の状況を確認する等、万一の発生に備えた。9月、県畜産試験場での発生に伴い管内で監視対象農場(2戸)が指定されたため検査を実施したところ、その内117頭飼養の一貫経営1戸で本病の発生を確認。当経営は2農場であったこと、農場内の通路が狭く重機が入らなかったこと等から、中規模飼養ながら防疫措置は困難を極めた。しかしながら、これまでのCSF対策で連携が強固となっていた南信州の関係機関が一体となり、防疫措置を完了した。未だ本病発生のリスクは継続するが、飼養豚へのCSFワクチン接種や野生イノシシ対策等、当地域はONE TEAMでCSF対策に今後とも取り組む。

1 CSF発生からこれまでの経緯(図1)

岐阜県での初発後、岐阜県および愛知県の野生イノシシの感染が確認された。翌年2月には愛知県の養豚場で発生し、当農場の疫学関連農場として、松本市のと畜場と宮田村の養豚場で発生が確認された。南信州地域は岐阜県・愛知県の両県に隣接しており、野生イノシシ等を介した本病の侵入リスクが高まっていたことから、4月より養豚場への防鳥ネット・防護柵の設置支援等の対策を開始した。

その後、三重県、福井県及び長野県と、各地で野生イノシシの感染が確認され、それに伴い各県の養豚場で本病の発生がみられた。このよう状況の中、長野県では野生イノシシによる感染拡大防止を目的として経口ワクチン散布を開始した。

9月13日、山梨県のと畜場でCSFの患畜が確認され、当該と畜場に出荷していた管内の養豚場について疫学調査を開始した。

同月14日に県畜産試験場、19日に当管内の養豚場でCSFが発生した。

2019年10月、防疫指針改正により、飼養豚への一斉ワクチン接種を開始した。12月

には飼養豚への免疫付与状況確認検査を実施し、現在に至る。

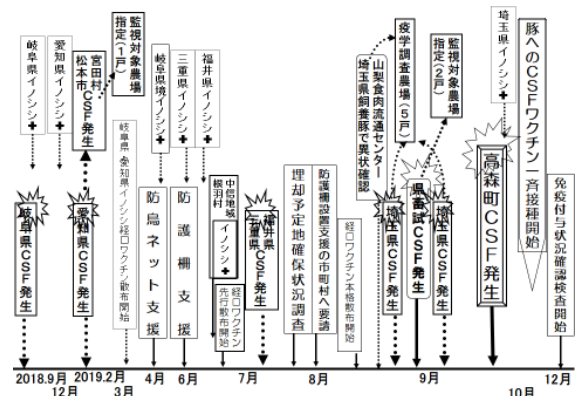


図1 CSF発生からこれまでの経緯

2 南信州地域のCSF対策

(1) 会議の開催

2019年4月以降、南信州地域では地域内の情報共有を図るため、多くの会議を開催した。具体的には連絡会議8回、対策本部会議1回、市町村とのイノシシ捕獲についての打ち合わせ4回、猟友会員向けの研修9回、また飼養豚への一斉ワクチン接種に関する打ち合わせを1回行った(表1)。

表1 CSF対策に係る会議

(2018年9月～)				
会議名	主催	参集者	回数	内容
連絡会議	地域振興局 農政課	連絡会議担当者	8	CSF防疫対策全般
対策本部会議	現地対策本部	対策本部構成員	1	防疫措置
野生イノシシ打合せ	地域振興局 農政課	調査対象区域 市町村	4	イノシシ検査協力 依頼
猟友会への研修	地域振興局 林務課	猟友会員	9	狩猟時の衛生対策
一斉ワクチン接種 打合せ	家畜保健衛生所	市町村・獣医師	1	一斉ワクチン接種 段取り

(2) CSF に関する啓発活動

養豚場でのCSF発生を防止するため、南信州地域では積極的に啓発活動を実施した。市町村や報道を通じてより多くの方々に情報提供する共に、まん延防止のための協力を依頼した。一方で養豚農家には電話や広報により、度重なる飼養衛生管理基準徹底の確認と注意喚起を行った(表2)。

表2 CSF対策に係る啓発活動等

(2019年4月～)			
内容	実施者	対象	回数
市町村長会議	地域振興局長	市町村長	6
市町村への依頼	地域振興局長・農政課長	市町村長	10
報道への情報提供	地域振興局長	報道機関	3
防疫演習	連絡会議構成員	連絡会議構成員	2
異状の有無確認	家畜保健衛生所	養豚場	11
家畜衛生広報いいた	家畜保健衛生所	養豚場・関係機関	15
注意喚起FAX	家畜保健衛生所	養豚場	5

(3) その他防疫対策

南信州地域の県機関の他、市町村、JA、施工業者および民間獣医師など、多くの方々の協力のもと、防鳥ネットと防護柵の設置支援、埋却予定地の確認、野生イノシシへの経口ワクチン散布を実施した(表3)。また当地域独自の対応として、貴重な中ヨークシャー種を保存するため、凍結精液作製を実施した。

表3 その他の防疫対策等

(2019年4月～)					
内容	実施者	対象	回数等	詳細	
防鳥ネット設置	準備	市町村・JA・地振・普及C・施工業者・地域協・家保	設置養豚場	延べ49名	農場現地調査
	施工			延べ69名	設置の技術支援
防護柵設置準備	農業技術課、地振・普及C・家保	養豚場全戸		延べ68名	農場現地調査と設計
埋却予定地状況	農地整備課・JA・家保	養豚場全戸		延べ36名	具体的な掘削等の事前検討
野生イノシシへの経口ワクチン散布	園畜・地振・普及C・家保	ワクチンベルト	2回		先行および本格散布
種の保存	飯田市・畜産試験場・大学・民間技術者・家保	中ヨーク種飼養養豚場	1回		採精から凍結精液の作製

防鳥ネットについては2019年4月より、南信州地域では県内で先駆けて設置支援を開始した。入念な現地調査と農家との打合わせにより、各農場の実情に合うように設計を行った。また設置の際には市町村職員、地域協ならびに地域県職員が、時に危険を伴う作業に携わった。防護柵については野生鳥獣分野に詳しい農業技術課の専門技術員と共に調査後、設置を行った(写真1)。

写真1 防鳥ネット設置・施工の様子



埋却予定地の確認は2019年8月より実施した。全養豚場について地域振興局、市町村およびJAと共に巡回し、飼養頭数に対し面積は十分であるか、実際に掘ることが可能であるかを調査し、万一の発生に備えた(写真2)。

写真2 埋却予定地確保状況調査



野生イノシシへの経口ワクチンについては、猟友会の協力のもと山中に入り、散布および回収を行った（写真3）。

写真3 経口ワクチン散布の様子



(4) CSF 対策に係る養豚場への対応

2019年6月、7月および10月にそれぞれ1件ずつ異常豚の通報があり、養豚場への立入検査とCSF遺伝子検査を実施した。

9月には埼玉県の養豚場でのCSF発生に伴い、疫学調査で山梨県と畜場での交差が疑われた4戸の立入検査およびCSF遺伝子検査を実施した。この間農家は、最大22日間移動自粛となった。また県畜産試験場での発生時には2戸の監視対象農場への立入検査、管内農場での発生時には7戸の搬出制限区域内農場への対応を実施した。

その他にも管内の野生イノシシのCSF陽性に伴い10戸が監視対象となり、立入検査や報告徴求等の対応を実施した（表4）。

表4 CSF対策に係る養豚場への対応

状況	管内 異常豚通報 (6~10月)	CSF発生			管内 イノシシ (7月~ 7月~)
		山梨県・埼玉県 (9/12)・(9/13, 17)	県畜産試験場 (9/14)	管内 (9/19)	
対応した養豚場	3戸	4戸 (疫学関連)	2戸 (監視対象)	7戸 搬出制限区域内	10戸 監視対象
対応内容					
立入検査	4回	6回	2回	0回	10回
PCR検査 (採血)	4回	6回	2回	0回	3回
移動に関する制限 (最大延長)	3日	22日	4日	防疫措置完了後 例外協議後	*監視対象農場検査プログラムに基づく

2019. 8. 21~ 対象農場: 生体移動のみ採血(PCR-ELISA検査)
2019. 11. 13~ 対象農場: ワクチン接種地域の「初回接種において接種除外の豚が存在する農場」①哺乳豚の接種終了 ②出荷20日前の豚の豚と寄場への出荷の終了をもって対象からはされる

3 管内でのCSF発生について

(1) 管内養豚場でのCSF発生の概要

当農場は県畜産試験場での発生に伴う監視対象農場に指定されたため、2019年9月17日、清浄性確認のため立入検査を実施し、その際、複数頭で体温上昇および白血球数減少を確認した。19日には解剖豚が疑似患畜と確定されたため、9時15分より防疫措置を開始し、翌日の19時15分に完了した。

当養豚場は一貫経営で、飼養頭数は合計117頭、そのうち25頭が繁殖豚であった。

繁殖農場と肥育農場の2農場があり、両農場間は約2km離れていた。なお埋却地は繁殖農場付近にあったため、肥育農場の豚については繁殖農場へ運搬し、埋却した。

初動防疫、消毒ポイントの運営および飼養豚へのワクチン接種の際には、南信州地域の県職員、市町村職員、獣医師会および地域協などから525名、また他地域県職員からも45名の動員があった（表5）。

表5 防疫対応時動員数

	(名)					小計
	地域内			地域外		
	県	市町村	団体	県	委託(雇用)	
繁殖農場	69	15	20	7	0	111
肥育農場	29	2	19	5	0	55
集合基地	18	0	0	7	0	25
消毒ポイント	267	0	0	18	253	538
豚へのワクチン接種	39	15	32	8	0	94
小計	422	32	71	45	253	823

(2) 防疫措置における課題

当農場で初動防疫を実施する上で直面した課題について述べる(図2)。

まず一部豚房の床のスノコの取り外しが不可能であったため、スノコ下の汚染物の除去作業が難航した。また農場内には多くの設置物や不要な物品があり通路が狭く、畜舎も老朽化していることもあり、重機の搬入が困難であった(写真4)。このため全て人力による作業を行うことになり、人員不足となった。これらの経験から飼養規模のみでなく、農場の立地や畜舎構造などの実情を考慮した動員計画を立てることが重要と考えられた。

写真4 防疫措置時の畜舎内の様子



また当所からは指示命令者2名、補助員2名が出動した。しかし当養豚場は2農場であったため、リーダーと補助員はそれぞれ2農場に分かれることとなった。その結果、各農場にはリーダーと補助員が1名ずつのみの状況となり、指示不足や、リーダーが休憩をとれず疲弊する状況が生じた。

このことから、本事例のように複数の農場で同日に初動防疫を行う等、指示システムの不足が予想される場合には、予め他地域の家保職員にリーダーとしての配置要請をすべきだと考えられた。

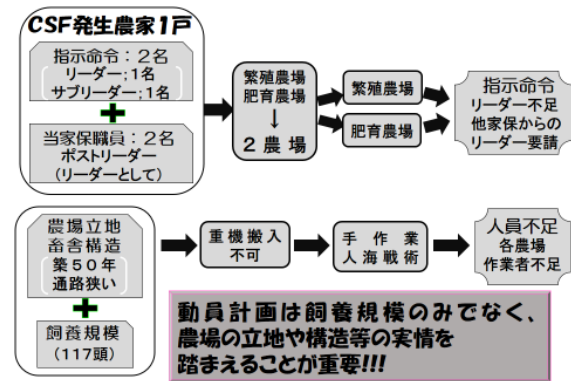


図2 防疫措置における課題

4 まとめ

南信州地域では近隣県でのCSF発生に始まり、野生イノシシによる感染拡大、管内養豚場での発生等多くの試練が訪れたが、会議や啓発活動によるCSFに関する地域の理解・農家の意識向上を図ったこと、埋却地調査等により万一の発生に備えたこと、防鳥ネットや防護柵の設置および野生イノシシへの経口ワクチン散布によりCSFの養豚場への侵入リスク低減に努めたこと等、地域一丸となって防疫対策に取り組んだ。

また管内養豚場でのCSF発生の際には迅速に防疫措置を完了することでまん延を防止した。加えて本県が防疫指針におけるワクチン接種推奨地域に設定された際には、飼育豚への予防的ワクチン接種を迅速に、当地域はもちろんのこと、全県において一斉初回接種を全頭を実施した。以上のように飼育豚へのCSF発生を予防する等、最大限の対策・対応に努めた。

管内養豚場での本病発生は非常に悔やまれるが、本発生農場に起因する続発例や新規発生が現在までみられていないことは、これまでの取り組みの成果だと考えられた。CSFの予防的ワクチン接種は開始されたもののCSF発生のリスクは未だ継続するが、南信州地域では引き続き地域一丸となり、対策に取り組む。